

# 趣旨説明

高谷好一

今回のテーマは「文明の地域性」ということだが、実は企画した我々も、悩んだ。現代文明というものが何か問わなければならない。そういう時に我々が何か言わなければならないということはわかっていたが、何にピントを当てて、どういう題でシンポジウムを開いたらよいか決まらなかった。そこである長老がこのテーマはどうかということで、「あゝそれがいい」というので決まった。

正直言って今日の発表者は本当に困られたと思う。「地域」と言っても取り上げ方によって本当にバラバラで、A01からB03までであるが、それぞれ違ったバイヤスで見ているんじゃないかと思うからである。例えば私の場合だと、地域というものを地面ばかり見ている、人のことをあまり見ていない。文化人類学や社会学の人だと、自然も見ておられるのだろうが、しかしそれよりも人をよく見ている。また、地域の固有性というか、一つの所だけをずっと見ている人もいるかもしれないし、広く他地域と比較しながら見ている人達もいるかも知れない。学者は皆専門にかたよったバイヤスで物を見るのだろうが、本当はそれでは具合が悪いのではないだろうか。できればそんな色眼鏡ではなく、もうちょっと素人っぽく、全部含めた形で、なおかつ「地域性」というものを考えてみたい。現代文明を問うということはそういうことではないかと感じている。

また「文明」という言葉にも問題がある。「文化」は個別生態に依存したもので、「文明」はもっと普遍的なものであるという言い方をするが、これも考えると、これだけ価値の転換を迫られている時には、間違いなのかも知れない。そういう意味で言うと「地域性」にしる「文明」にしる、本当はデフィニションがない。もっと言うと、今だからこそ既存のデフィニションを打ち破ってこういうことを議論しなければならないのだろう。とにかく問題の所在はわかっているのだから、それぞれ自分なりの切口で、自由な発表をして頂ければと思っている。